慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの価値論中に於ける難関に就て
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.7 (1923. 7) ,p.1130(156)- 1147(173)
JaLC DOI	10.14991/001.19230701-0156
Abstract	
Notes	アダム・スミス生誕二百年記念号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミスの價値論中に於ける難關に就て

三邊金藏

（一）

自分は嘗てアダム・スミスの價値論が甚だ難解にして、人をして容易に其眞意を捕捉するを得せしめざる所以は、彼が一七七六年四月一日附の書中に於て彼の價値論を批評して「若し君が此所な僕の爐邊に在らゝならば、僕は君の原理の二三に異論を唱へるであらうと想ふ。僕は農場の地代が其生産物の代價の何等かの部分をなすとは考ふることが出來ぬ、否僕は代價は全く數量と需要とによりて決定せらると考ふるものである」と說けるヒユームの忠言に動かされて「國富論」(Wealth of nations)第二版以後に於て、第一版の所言に或は大なる改竄を加へ、或は小なる修正を施したる這般の事情裡に伏在すと謂はねばならぬとなし、從つて初めに先づ「國富論」(Wealth of nations) 第一版に就きて彼の價値論を討究し、次に第二版以後の改訂版に就きて其が如何なる變化を彼の前論の上に齎らせるやを明かにする方法に出んならば、最も自然に彼の眞意を忖度するを得可しといふ見地に立ちて、スミスの價値論を檢覈し、因つて彼の價値論は所謂生産費說――精しくは勞働にて測られたる生産費說と謂ふ可きものなり――を以て終始一貫せるものにして、決して一部の人々の言ふが如く所謂勞働價値說――此說甚だ多きは寧ろ怪む可し――を以て之を唱ふ可きものにあらずとの結論に到達したるものであるが（本誌第十五卷第二號――大正十年二月號――の拙稿「アダム・スミスの價値論に就て」參照）而して其は幸にして小泉敎授の贊成を買ひ得たるが如くであるが（本誌第十六卷第三號――大正十一年三月號所載「リカルドオの價値論（二）」參照）、近來再び同じ問題に歸りて其研究を新にするに及び、自分當時の結論は、スミスの價値論中に於ける難關を悉く順に押し開きて之を得たるものにあらずして、其或るものは全く之を開かずして其儘に之を委したるの憾み甚だ大なるものある其一方に於て、結論其ものも、積極的方面に於て少しく之を改むるにあらざれば、未だ以て完全にスミスの眞意を道破し得たるものと爲すに足らざるを發見したのである。因つて以

下暫く筆硯を新にして、再びスミス價値論の難關を開き、斯くて曩日の議論の缺點を補ふと共に結論の歪めるを正して、スミスの眞意を此度こそは誤なく讀者の前に闡明しやうと思ふ。

（二）

却説然らばスミスの價値論中に於ける難關とは果して何であるか。ボェーム・バウェルクの說く所（Kapital und Kapitalzins. S. 63）に私見を交へて之を言へば其は次の如きスミスの言を指稱するものに外ならぬのである。

「故に此事態に於ては勞働の全生産物は必しも勞働者に歸屬せず。彼は大多數の場合に於て彼を雇傭する資本の所有者と之を分たざる可からず。或る物の獲得又は生産に普通に使用せらるる勞働量は、何れも其が普通に購買し支配し若くは交換し來る可き筈の勞働量を左右し得る唯一の事情にあらず。一追加量が勞銀を前拂し其勞働の材料を供給せる資本の利潤の爲めに當然支拂はれざる可からざるは明白なればなり。」（Wealth of Nations, edided by Cannan. vol. I. p. 51）

勞働者は「彼の勞働の蒐集若くは生産するものゝ一部を地主に與へざる可からず。此部分、若くは畢竟之と同一事たる此部分の代價は地代を形くるものにして、物の大多數の代價に於て第三の構成部分を成す。」（同上）

「資本が特定の人の掌裡に蓄積せらるゝや否や、彼等の或者は自然其製作物の賣却に依り、若くは其勞働が材料の價値に附加する所のそれに依りて利潤を得んが爲め、材料と生活費とを供して勤勉なる人士を勞働に從事せしむる爲めに之を雇ふに至る可し。完成せる製作物を貨幣に對し、勞働に對し、若くは又た他の財に對して交換するに際しては、材料の代價と勞働者の勞銀とを支拂ふに足り得可きもの以上、更に彼の資本を此企業に賭せる事業企畫者の利潤の爲めに何物かゞ與へられざる可からず。故に此場合に於ては、勞働者が材料に附加する價値は二部に分たる、其一つは彼等の勞銀を支拂ふものにして、他は材料の全蓄積と前拂せる勞銀とに對する雇主の利潤を支拂ふものなり」（Wealth of nations, p. 50.）

蓋し是等の言は、スミスの價値論に就き、此は之を勞働價値說と解す可きや若くは又た勞働生産費說と解す可きやと勘考しつゝある者にとりては洵に一個の謎にして、其前半と後半とはボェーム・バウェルク氏の夙に指摘せるが如く「二つの互

に牴觸する見解」（前掲書六二頁）を包含するものゝ如くに解せらるゝからである。

乍併是等の難關は各一句宛に就きて之を凝視せず、前後の文章と比較照應せしめながら全體の上より之を考察し行くときは、比較的容易に之を闡明し得るのであつて、軈て又たスミスの眞意に適中し得る所以たるのである。乃ち今先づ第一の「故に此事態に於ては勞働の全生産物は必しも勞働者に歸屬せず。彼は大多數の場合に於て彼を雇傭する資本の所有者と之を分たざる可からず。或る物の獲得又は生産に普通に使用せらるる勞働量は、何れも其が普通に購買し支配し若くは交換し來る可き筈の勞働量を左右し得る唯一の事情にあらず。一追加量が勞銀を前拂し其勞働の材料を供給せる資本の利潤の爲めに當然支拂はれざる可からざるは明白なる所なればなり」といふ句をとりて、之を彼が「資本の蓄積と土地の私有とに先立つ太古草昧の社會」に就て「此事態に於ては勞働の全生産物は勞働者に歸屬す、然れば、或る物の獲得若くは生産に普通に使用せらるる勞働量こそ其が普通に購買し支配し若くは交換し來る可き筈の勞働量を左右し得る唯一の事情なれ」と言へる句と相對せしめて之を見るときは、彼の意は、自分の嘗つて述べたるが如く、資本が未だ特定の人の掌裡に蓄積せられざる太古の社會に於ては、勞働者は自己の生産物の全部を自己の手に收め得るが故に、其生産に費さるる勞働量のみを目標として其價値を決定し得れども、資本が一旦特定の人の掌裡に蓄積せらるゝに至りたる今日の社會に於ては、勞働者は其生産物の全體を自己の掌裡に收むることゝ能はずして、其一部分は之を資本家に分ち與へざる可からざるが故に、一物の價値は之が獲得又は生産に費さるる勞働量のみを目標として之を定むるを得ず、必ず之に加ふるに利潤に該當する勞働量を以てせざる可からず、換言すれば一物の價値は利潤に該當する丈け高められざる可からず、蓋し之を爾かせざれば勞働者は自己の勞働に對して十分なる報酬を收むるを得ざるが故なりと謂ふに在りと推察し得らるゝのであつて、彼が第二版を出すに當り、第一版に於て後者は單に「此事態に於てほ或る物の獲得又は生産に普通に使用せらるる勞働量こそ、其が普通に購買し支配し若くは交換し來る可き筈の勞働量を左右し得る唯一の事情なれ」と謂ひ、前者は單に「故に此事態に於ては、或る物の獲得又は生産に普通に使用せらるる勞働量は、決して其が普通に購買し支配し若くは交換し來る可き筈の勞

働量を左右し得る唯一の事情たることなし」と謂へるを補ひて、夫れ〳〵に右の如き理由を詳細に點綴し來れるも亦た軈て此意をより明瞭ならしめんが爲めに外ならずと推察す可きで。あらうと思ふ（註一）。而してスミスの意を斯く解するときはボェーム・バウェルクの所謂「二つの互に牴觸する見解」は互相容れ相合して自ら一個の立言中に融け行くを見るのであるが、同じ方法に依るときは第二の難關も亦た容易に其前に開かれ行くを見るのである。蓋し勞働者は「彼の勞働の蒐集若くは生產するものゝ一部を地主に與へざる可からず。此部分、若くは、畢竟之と同一事たる此部分の代價は地代を形くるものにして、物の大多數の代價に於て第三の構成部分を成す」といふスミスの言は、彼が後に至りて「土地が私有財產となるや否や、地主は勞働者が土地より生產し若くは蒐集し得る殆んど總ての生產物より配當を要求す。彼の地代は土地の上に加へられたる勞働の生產物よりの第一の控除をなす」（前掲書五七頁）と說く所と合せて之を勘ふるときは、前半と後半とは愈々益々乖離して到底拾集す可からざるものの如くに思はるるのであるが、併し其初めに歸りて此句の前段に「一國の土地が總て私有財產となるや否や、地主は總ての他の人士と同じく蒔かざし所に苅ることを愛しみ、其自然の生產物に對してすら地代を要求す。（於是乎）土地が共有なりし時には、唯だ其を採集する煩勞を費すのみなりし森の薪、野の草、及び土地一切の自然的果實は各自の上に決定せられたる一個の追加的代價を有するに至る。然る時は彼は是等の物を採集す可き許可に對して支拂ふ所なかる可からず」とあるに合せて之を勘ふるときは、スミスの眞意は、一國の土地が共有に屬せし時代に於ては、勞働者は、無償に之を採集するを得たるが故に、其生產物の價値を定むるに際しては之を採集するが爲めに普通に費さるる勞働量のみを標準とするを得たれども、一旦土地が私有財產となり、地主が其自然的生產物に對してすら地代を要求する今日の社會に於ては、勞働者は自己の勞働の全生產物を自己の掌裡に收むることを得ずして、一部は之を地主の手に頒ち與へざる可からざるが故に、其價値を定むるに方りては、此間の事情も亦た之を斟酌せざる可からずして、從つて昔日の如く之を蒐集若くは生產するが爲めに普通に費さるる勞働量のみを標準とするを得ず、必ず之に加ふるに地代に該當する勞働量を以てせざる可からず、故に大多數の物――地代を必要とせざる少數の

ものを除きたる殘餘――の代價に於ては、地代が斯くて第三の構成部分を成すに至るといふに在るのであらうと思惟せらるゝのである。而して彼の此意は、自分の嘗て試みたるが如く、第一版の所論を參考に供するときは更に一層明瞭となるが故に、今煩を厭はずして其全文を此所に引用し置くならば、其は斯うである。

「一國の土地が總て私有財産となるや否や、地主は總ての他の人士と同じく蒔かざし處に苅ることを愛しみ、其自然の生産物に對してすら地代を要求す。（於是乎）土地が共有なりし時には、唯其々採集する煩勞を費すのみなりし森の薪、野の草及び土地一切の自然的果實は、各自の上に決定せられたる一個の追加的代價を有するに至る。然る時は世人は是等の物を採用す可き許可に對して支拂ふ所なかる可からず。然れば貨幣に對し、勞働に對し、若くは又た他の財に對して彼等を換ゆるに際しては、彼等を採集する勞働と、此勞働を雇傭する資本の利潤とに對し當然支拂はる可きもの以上更に許可の代價に對し若干の斟酌加へられざる可からず、而して是れぞ最初の地代を成すものなれ。故に物の大部分の代價に於ては、地代が斯くて價値の第三の源泉を成すに至るものとす。此事態に於ては、或る物の獲得又は生産に普通に使用せらるる勞働量も、將た又た此勞働の賃銀を前拂し材料を供給する資本の利潤も其が普通に購買し支配し若くは交換し來る可き筈の勞働量を左右し得可き唯一の事情たらずして、地代なる第三の事情も同樣に考慮に加へられざる可からず。然れば物は其を市場に齎らす人をして此地代を支拂ふを得せしめんが爲め、追加的勞働量を購買し支配し若くは交換し來らざる可からず。」（註二）。

（註一）　キアナンは是等の改訂に關して「原始の狀態より如何にして利潤及び地代が發生するに至りしかに關する理論に二三の興味ある變更あり」たりとなし「假令スミス自身は、恐らくは、近來の研究者の或者が是等の諸點に重大なる意義を附するを見て驚くであらうが」（Wealth of nations edited by Cannan vol. I, p. XIV）と附言して居るのであるが、自分の場合はスミスの理論には何等の變更を見ざるものなりと言ふのであるから、キアナンの同じ評言は當らずして、却つて此は恐らくスミスの眞意に適へりと稱す可きものであらう。

（註二）　此點に關しては或は次の如き疑問を提出し得る、曰く、スミスが第二版に於て其盟友ヒューームの忠言に鑑み第一版の所説に大なる斧鉞を加へたりとせば、彼の議論は彼此の間に於て自から相違する所なかる可からず、然るに今其事なきは如何？之れ甚だ怪しむ可きにあらずやと。而して此點に關する自分嘗ての答は國富論

第十一章地代を論ずる章下に「地代は勞銀及び利潤と異る道程を經て物の代價の組成中に入る」とあるを傍註として「改訂の要旨は、第一版の所論の如くなる時は、地代も亦た爾餘の構成要素と同じ過程を經て代價中に入るが如く解せらるゝを以て、其を避けて、單に地代も亦た代價の構成部分たることあるを、示し置くに止めんとしたるに在りと謂ひ得可し」といふに在つたのであるが、今にして思へば、スミスは此場合に於ても、地代一度發生するときは、勞働の全生産物は勞働者に歸屬せずして、「彼の勞働の蒐集者くは生産するものゝ一部を地主に與へざる可からず」といふ結果となる一事實を指摘して、他の一切の理由に代へ、因て以て彼自身の主張を固守したるものと解せねばならぬのである。即ちスミスはヒュームに和して兩も同せざりしものと言はねばならぬものである。但し之を斯く解するときは、彼の價値論は彼の地代論と互に相容れずして、此方面よりも亦た疑團を生ぜしむるのである。而して之を一掃し去らんが爲めには、先づ彼の地代論を明らかにするを要すといふことゝなるのであるが、併し自分はスミスが夙にシエットランド島附近の地方に於ては、「地代は一部分海魚にて支拂はる、然れば地代（實物地代の意なるべし）が其物の代價の一部をなすといふ極めて僅少なる實例の一つは、此地方に見出さるのである」（Wealth of nations, p. 146）と記き居る事實に徵して、彼は初めより地代は代價の一部分をなすと主張したるものなるを知るといふを以て、一旦此問題を打ち切つて置かうと思ふ。

却説然らば最後に、既記の「資本が特定の人の掌裡に蓄積せらるゝや否や、彼等の或者は自然其製作物の賣却に依り、若くは其勞働が材料の價値に附加する所のそれに依りて利潤を得んが爲め材料と生活費とを供して勤勉なる人士を勞働に從事せしむる爲めに之を雇ふに至る可し」と云ふ句に始まる一節の章句は、如何に之を解釋して總ての疑問を一掃す可きであらうか。自分の嘗て此點に關して試みたる所は、全く一個の失敗にして、此所に反覆し得可き性質のものに屬せざるが故に、今は全く新たに考案を積まざる可からずとして、最初に先づ問題の意味を再説すれば、其はスミスが右の句に次で「完成せる製作物を貨幣に對し、勞働に對し若くは又た他の財に對して変換するに際しては、材料の代價と勞働者の勞銀とを支拂ふに足り得可きもの以上更に、彼の資本を此企業に賭せる事業企畫者の利潤の爲めに何物かゝ與へられざる可からず」と云ふは、一物の代價は其生産又は獲得の爲に費されたる勞働量と地代及び利潤に該當する勞働量とより成ると説くものにして、彼が更に一轉して「故に此場合に於ては、勞働者が材料に附加する價値は二部に分たる、其一つは彼等の勞銀を支拂ふものにして、他は材料の全蓄積と前拂せる

勞銀とに對する雇主の利潤を支拂ふものなり」といふは、一物の價値は「費されたる勞働量に依りて定められ、利潤及び地代は之より奪取せらるゝものに過ぎずと說くものなるが故に、此兩者は互に相反對すと謂はねばならぬのであるが、一章句中に於ける此矛盾は如何にして之を融合調和し得るやと云ふに外ならぬのである。而して自分は之を以て難關中の難關となすものであるが、併し自分は此場合に於ても前後を參看し彼此を照應せしむるときは、スミスの眞意は之を知るに難からずして、其は固より前者に在りと謂はんと欲するのである。蓋し自分の見る所を以てすれば、彼が「故に此場合に於ては、勞働者が材料に附加する價値は二部に分たる、其一つは彼等の勞銀を支拂ふものにして、他は……雇主の利潤を支拂ふものなり」といふは「材料の代價と勞働者の勞銀とを支拂ふに足り得可きもの以上更に彼の資本の此企業に賭せる事業企畫者の爲めに何物かゞ與へられざる可からず」と計算して、購買者に課せられたる價値が、後に至りて實際に勞銀と利潤とに分たるゝ謂はゞ結果の側より之を說くものに外ならずと解す可きものであるからである。而して又た之を斯く解するときは、彼が是等の章句に次げる他の個所に於て

「故に物の代價に於ては、資本利潤は勞銀とは全く相異り、全然別個の原則によりて規正せらるゝ一構成部分を成す」と說く所と互に相容るゝを見るのであるが、併し他方に於ては次の如き反對論も亦た之を想像し得るのである。曰く、一物の材料の價値以上に出づる價値が、其上に費されたる勞働量に依りて定められずして、更に他の事情に依りて左右せらるとすれば、其は明らかに「勞働者が材料に附加する價値」とのみ言ふ可きものではないであらう、而して若し又た反對に、其が洵に「勞働者が材料に附加する價値」なりとすれば、其は又た明らかに費されたる勞働量の外に更に他の事情に依りて左右せらるゝが如きものではないであらう、故に「勞働者が材料に附加する價値」が費されたる勞働量と、利潤に該當する勞働量とに依りて、定めらるると云ふが如きことは、あり得可からざる所であると。而して斯の如き反對論に對しては、スミス自身が、勞働者の產生する所の價値は其爲めに費されたる勞働量のみに依りて決定せられずして、利潤及び地代に該當する勞働量丈け更に高めらるると說きたりといふ證據を擧ぐるの外、他に完全に之を排す可き途なきを見るのであるが、自分は次の如きスミスの言に於て恰も之を發見し得るが故に、此

關門も亦た斯くて玆に開かれ了るとなすものである。

「文明國に於ては、其交換價値が勞働のみより生ずる商品は極めて僅少に過ぎずして其遙かに大なる部分の交換價値には地代及び利潤も亦た大ひに寄與する所あるが故に其勞働の年々の所產は之を產出し準備し而して之を市場に持ち來す爲めに使用せられたる勞働量よりも遙かに大なる勞働量を購買又は支配するに常に十分なる可し」(Wealth of nations, p. 56)

（四）

却說以上述ぶる所に從へば、スミスの價値論が所謂勞働價値說を以て之を目す可きものにあらざるは、甚だ明瞭にして最早秋毫の疑だも容れずと言ふ可きである、が、然らば彼の價値論は自分の嘗て言へるが如く、(勞働)生產費說を以て之を稱し得可きものであらうか否か。スミスが既に價値の構成部分として前記の三要素を擧げ居る以上、此は勿論其所なりと謂はねばならぬかの如くである。而して自分も亦た此意味に於て曩きに之を肯定したのであるが、併し今にして之を見れば、スミスの價値論は到底普通の意味に於ての(勞働)生產費說を以て之を目し得可きものではないのである。蓋しスミスは既記の諸章句に於て或は「普通に使用せらるる勞働量」(the quantity of labour commonly employed) と謂ひ、或は「其が普通に購買し、支配し若くは又た交換し來る可き筈の勞働量」(the qauntity of labour which it ought commonly to purchase, command, or exchange for.) と謂ひて、常に尋常普通的、標準的勞働量を目標に置きて立論して居るからである。詳しく言へば、一物の生產に普通所要以上の勞働量、若くは普通所要以下の勞働量が投せらるゝことあるも、其は決して其物の價値を決定すること能はずして、價値は依然として普通所要の勞働量を標準として決定せらると說いて居るを見るからである。否、啻に然るのみならず、スミスの考ふる所に從へば、既に業に生產せられたる物の價値も亦た、之が生產に投せられたる勞働量に依りて決定せられずして、其が其所有者に省くを得て、他人に之を課する其勞働量に依りて決定せらるゝのである。曰く、「悉皆の物が之を獲得せる人にして、又た他の或る物の爲めに之を賣却せんと欲するか、若くは他の或る物と之を交換せんと欲する人に對して眞に値する所は、其が其人自らに之を省き得て、他人に課するを得る勞苦と煩瑣となり。」故にスミスの價値論は、是等の諸

點より推して之を言へば、一物の價値は之を生産(又は再生産)するに普通要せらるゝ所の勞働量――地代及び利潤に該當する勞働量に、之を生産する勞働の量を加ふ――に依りて定まるといふ一種の價値說、強ひて名けて之を言へば、標準勞働(再生産費說であると稱す可きであらう(註三)。否！更に一歩を進めて之を言へばスミスの所謂「普通に使用せらるゝ勞働量 (the quantity of labour commonly employed) とは、特に勝りたる辛苦と、常人以上に出づる熟練及び巧妙とを用ゐざる尋常一樣の勞働を基として之を計るものにして、傑出せる辛苦(superior hardship)と「普通程度以上の熟練及び巧妙」(an uncommon degree of dexterity and ingesmity) とに對しては、特に斟酌を加ふるの意なるは、スミスが上述の問題を論究せる第六章の劈頭に說く所に徵して、略ぼ之を察知し得るのである。因つて之をも合せて之を再言するとせば、スミスの價値論は、一物の價値は世間並程度の熟練と巧妙と並に勤勉とを以てして、之を生産(又は再生産)するに必要なる勞働量――地代及び利潤に該當する勞働量を含む――に依りて定まる、といふことゝなるのであつて、是を彼のマルクスが(故に)社會的に必要なる勞働量若くは一使用價値(物)の生産に社會的に必要なる勞働時間こそ其價値の大さを決定するものなれ」(Das Kapital S. 6)となし、而して其所謂「社會的に必要なる勞働時間に就ては「社會的に必要なる勞働時間とは現存する世間尋常の生産諸條件と世間並み程度の勞働熟練及び强度とを以て何等かの使用價値(物)を産出する爲めに、必要なる勞働時間である」(同上五頁)となせると比較するときは、兩者の間に――少くとも形態の上に於て――甚だ大なる類似點あるを發見するのである。而して然るときは、吾々は更に轉じてスミスの價値論とマルクスの價値論との交渉如何といふ興味ある問題を玆に得來るのであるが、此は果して自分一個の幻覺にして止まるものであらうか否か。暫く記して識者の敎を俟つ所以である。

（註三）　スミスは價値の本質は勞働購買力又は勞働支配力に在りと爲したるが故に、此點より彼の價値論を稱して勞働購買力說又は勞働支配力說と言ふとすれば、或は遙かに簡便にして濟むであらうが、此所では其大さを決定するものは何ぞやといふ方面を主として之を說くが故に、其方面より見て斯くは名くるのである　（終り）